



珍奇物語

初編

上

現

持 へ 24	持
1951	
1	





凡例

此書は元來兒童の惑を解き且各國
 風習は奇異あるを知らしめ且各國
 究理書地理書等を極く淺く抄譯し之
 を上下の二卷に分記して以て
 く解し易きを希ひども敢て私意を
 之ぞれば披閱乃賢童之と笑ふ勿れ

明治壬申初冬

編者あり



1951
1-2



童蒙辨惑

珍奇物語



東江譯
 惟々堂

目録

妖怪の説

幻燈の事

人魂の事

魔塚の事

虹の事

日暈月暈の事

世界中の異風



童蒙 辨惑 珍奇物語初編上

東江樓主人 纂輯

妖怪の説

○往古より列日本国を。西洋亦ても。冤鬼或る妖怪乃説あり。人も生くあれと見し。杯やゆい。ゆい。最も多け。色ど。之。皆誰惑。癖とあり。その妄念より出る。或る夢。阿る。

ひも戲造る。左もなげれむ。暗夜も墓地も
を徑過る時恐怖の余り一像と想出さるる
因るりれふて。決して真の怪しきものある
をき理あり。茲より一の奇談あり。某地の野外
ふ土橋ありけるが。此辺る人家もなく最凄
し。死處也名。往古より之と幽霊橋と唱へ。雨
夜ふる。幽霊の出しあや往くありし杯とい
ひ傳へ。兩夜もハ誰あつとみと過る者も

をかりし。或人無據用事ありて。兩夜も此
橋と渡り。物凄しく思ひし折柄忽ち向より
頭長く。体は毛の如き白衣を着たる奇怪
物現れ出て急ぎ我方へ襲ひ来るに様子も
不。最早遁んぞけるも叶ふまじ。空しく彼も
食はるゝより。寧ろ刀に及限り防ぐべし。悪
き妖怪の所業ふりやと。獨り嘔き諸手を抜
き。不意に躍り怒りて。むづと組付ければ。妖



怪と驚きたる様にて大に啼叫び互に押合
 するが。妖怪と畏る。足と踏外一河中に落ち
 去。故に人ら。疾走す家へ帰り。大に誇て曰ふ
 我今彼乃幽霊橋にて妖怪に出逢ふと云ふ食
 るれんとせし。我吾力を任せて。河中に掛
 たりたり未だ影も終らざるうち外より
 一人びつと来り入る。色青がく声震
 へる。いふ今余彼の幽霊橋と通り、りけ

れば妖怪不意に飛降りし由余も大に驚
きたれども何ぞ恐るし小足んと暫時も阻
合しぐをりく適し難く遂に河中に投じ
危き命を助けたりや物怪す茲におおて初
く其妖怪小りくぞ却て我朋友あるあやと
知とり。若兩人こゝめて逢げんば互に鬼と
考し。怪とありて入まると人との傳へん○
又或臆病なる武士あり。夜中物凄き道と歸

まけれど傍の籬上より頸乃長き頭の巨を
る妖怪入る向て動揺する状あり。彼の武上
おろひし驚慌き直に長刀を引抜き躍掛つ
て切付多れば巨頭も真二小断て地は落ち
り。故に奔て家へ歸り。大に誇り曰ふ今我某
地におおて妖怪を斬りし。手お應て斃た
りを翌日朋友と伴ひ其地へ至り見よ。バ
たんの二つ小断れど地は落ち半分も尚不

籬上^{かきの上}に掛^かり居^いらる。是^{これ}を見^みる彼^{かれ}乃^{すなは}ち武^ぶ士^し大^{おほ}
 小^こ漸^{しだ}初^はく妖^{まじ}怪^り何^{なに}とぞ居^いるを^を知^しりたり
 と是^{これ}も若^{わか}く翌^{あした}日^ひ往^ゆく見^みざれば。魁^きとち^ち怪^{まじ}
 也^やありこと疑^{うた}ひあり。凡^{おほ}世^よの寃^{まじ}鬼^{おに}妖^{まじ}怪^りとい
 ふゆ能^よく其^{その}源^{もと}を探^{たづ}究^ねせば大^{たい}抵^{てい}み^みる之^{その}考^{こう}の
 類^{るい}ありべし。妖^{まじ}世^よ界^{かい}中^{ちゆう}よりなるとは。理^り外^{がい}の事^{こと}
 此^{こゝ}何^{なに}の由^{よし}を^を知^しらば。まこと實^{じつ}体^{たい}ありきと^と知^しらば。
 我^{われ}身^み目^め小^こ觸^ふるものなり



唯^{ただ}在^あり

幻燈の事

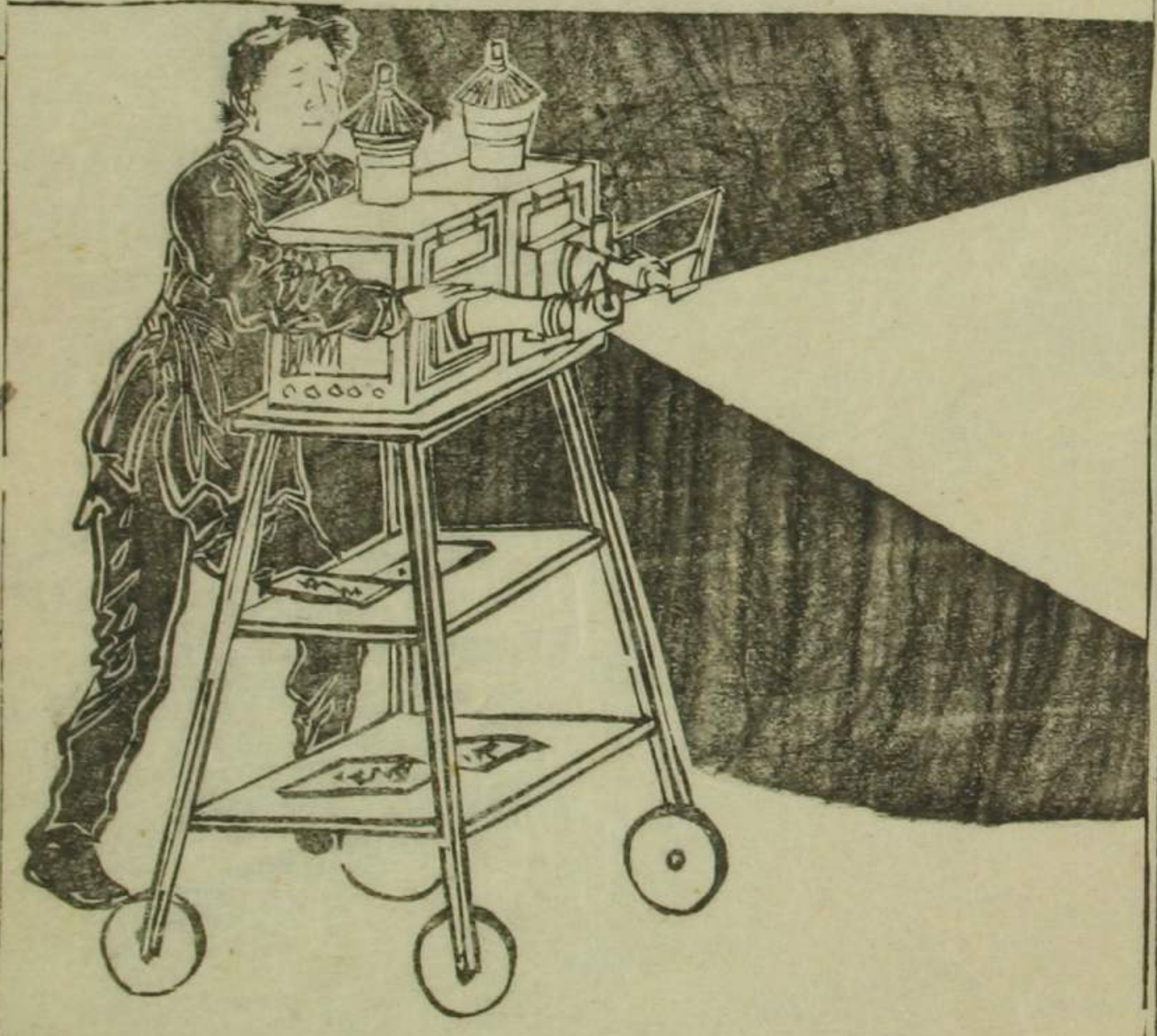
○**幻燈** 又戲造めて奇怪の状貌を寫し出す
幻燈といふは此あり。此仕掛は字弦の如し。
障子あぢ人寫さふ所をばしして物形を無物
の空中に現をもよおし其像を空中に浮遊し
て人あれを把つむを欲しと握るふと能
ず其様子又怪しむべきも此あり。此器械

を用る時をまづ暗黒處めて生ぐさき香を
焚き色く物凄き妖怪の活振をなす内は暗
黒空中に奇異ある形像濛昧と出て或る現
れ。或は隠れ。或は上り。或は下り。空中に進退
浮遊しを實に怪むべく。初之を見し者
真の妖怪と思はざるも此なる是も人あり
て用るあやを知らせば。固より怪むふ足ざれ
ども。若し人暗處に在て墓所の辺に之を現

其器械を進
退して其怪像
を大小め一或
る現隠れせば
人將之を見



て何と云ふん



人魂の事

○人魂 或人の向ふ。冤鬼妖物の後を全く虚説なるふと。初て其理と得たり。然れども人魂を必もあはれと云ふなうと云ふ。余正よ之を見あり。或る小雨降の夜墓所の近辺と通り一時新葬の元より青き火球現は出さ空中に浮遊し漸く我方へ来りしを我の

何の遺恨ありやと我大に怒り。飛無りて打落さんと急ぎ走りゆれど急よ遁去り我止まれは彼まこと止り。我行は彼行を我が動静を窺ふ状あり。我愈怒り。杖と打振りて追馳行きしをれば忽ち滅へる其跡あり。暫くありて遙小空中に復は風を後て飛りきたり。之を如何んの答て曰く決して怪しむは是くぞ螢火朽木生乃海魚火球の類は皆



時舟

ホスホルとりの火氣の水素とりの火氣と結合
 ひ。燐化水素となり自然の理合めて温乃た
 免は光を放つを此なり。其と同一種類のう
 ろゆをもち火の根と愛せざるものあり。ま
 此と恐る一人あるを聞け。又折るを
 朽ち腐るも。最も多し。火を放出する
 のあり。又生の海魚珠。海老など。暗処に
 持ちあは。白き光を放つを此なり。狐火或

人魂と唱ふる火も皆同トくホスホル乃
 先あれど隠多き地殊に墓所刑所等には
 最も多く現れ如何も物凄く見へおと不
 此氣に至て滲さを此故人あれを追へ其
 動きより空氣と動ク火も之がたふ動
 き人まゝ道なる火まゝ空氣も後て人と追
 ふれ似たり故又究理を測るは愚昧乃人
 々の畏しき物の様と思ひ或は幽霊遊出た

る杯と唱へ婦人小兒抱斯る火又行違ハ震
 ひ恐き氣絶たざる小至るあれ皆其原因を考
 へざる故あり元来此ホスホルとりゆる天
 地の間小具ハリたる六十八種乃元素の二
 して草木おも多少此氣をふくみ生物のハ
 最も多し故に死し後ち骨肉らるれ土に
 返ると此氣も離れ水素とりあまゝ六十
 八種の物乃一と合ひ前云へる磷化水素

とあり。酸素といふ氣は觸て光を發するものなり。斯く生物は多き氣を名が故に。基所
刑所は自然多く出さども。元ホスホルの
光を發火朽木の光は同トく。何ぞ怪しむ
ふ是ん

○又炭水氣より火を生ずるあり。此炭水
氣といふ六十八種の元素のうち炭素といふ
炭の本質の氣と水素といふ氣の集合より

るを此より。是も酸素といふ燃る氣は觸と
ば。速く燃るものなり。此氣は自然。石炭油の
多き土地。或る古井。よこは禽獸草木のくさ
り。つるを此より生ずるなり。越後の國あり。
古く井戸を掘んとて。地中を深く突たれを
其穴より火を吹だし。人々大に驚き。挿竹
を竈に當せ。亦其竹の先より火を發す。
故に之を家のうちらふ。引て毎夜燈火の代り

とあり。又之えんの
 枝筒えびを付つて所しよ
 々しみ導みちびき。夜よ
 職しやくなどの燈火とうか
 とあり。夜明よあけと
 ば其火そのひとあり
 あり。又夕刻ゆふがきの
 玉たまり。つけ木の



燈舟

火ひをよよきれば速すみく燃もへが何なにも不思議ふしぎ
 ありと云いふ。越後えちご七不思議しちふしぎの一いちありと云いへど
 も。決けつして不思議ふしぎありと云いふ。越後えちご石炭油せきたんあぶらの
 多おほく出る土地ちをれば。炭水氣たんすゐきを多おほく生なむる
 故ゆゑあり。○石炭坑せきたんあななる此炭水氣このたんすゐきを生なむる由よし
 と多おほき由よしあり。ときより石炭堀せきたんほりの燈火とうかより
 燃もゆるりて大火おほいとあり。人足多ひとあしおほく焼死やけどぬるや
 あり。故ゆゑ西洋せいやうを石炭坑せきたんあなへ。躰たり火ひを入いる

こやあー○まゝと池あゝひら井戸あどあて
 人の死したるのち。寝く火の燃るあとり。人
 とまを亡魂の出る杯とりめを恐るゝあ
 まども。其實人乃瘠の腐敗たる所より。炭
 水気。或る前より燐化水素と発。空中
 の酸素と合ふて燃ゆるを託る。又古池深
 山あぢは風雨の夜折く火のまゆるあ
 たり。何れも知らざる愚民。之を狐火扱ふ



曉所也

いひまゝと妖怪の仕業をどし思ふるれとも。
実る幾年となく禽獸草木あどの積貯れと
る処より。炭水氣の癸まると此なり。まゝと兩
降の時ら。心の暖らるるとの由へ。炭水氣の
蒸騰るお中も多し。此時風強ければ酸素も
多き由へ。火の燃るおとも甚ざし。雨風乃夜
お多く火の燃出るら妖理なる。凡世に究鬼
妖怪と稱するも。皆妖氣の彰るれとも。圖と

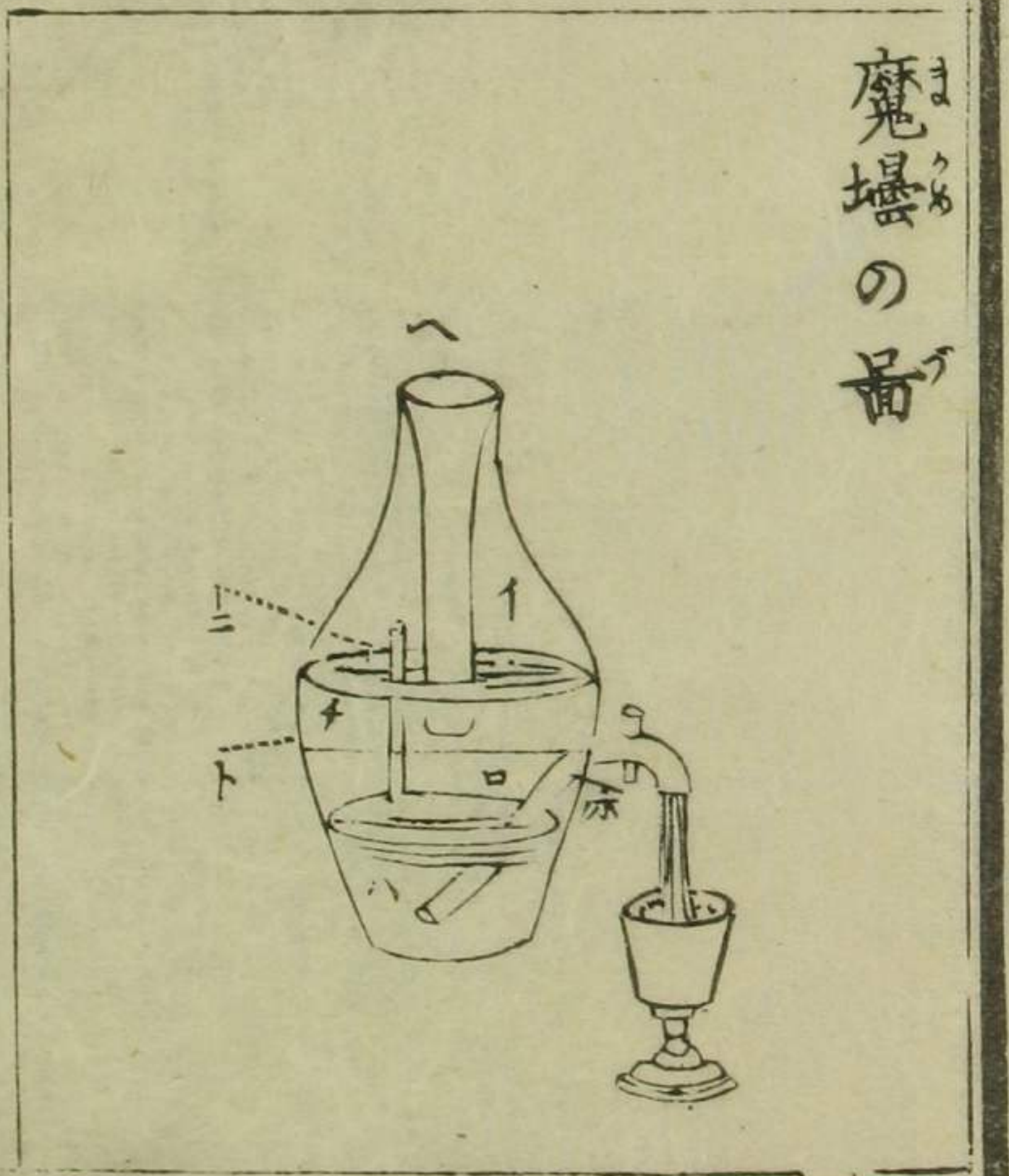
ず見馴ざる物に出遇へば唯驚て鬼とる
妖とる。其原因と探究をせよ。其きふよる。却
て今日見馴たる物の内よ。不思議の意多し
とい人ども。人敢て之と怪しむ者あし。よく
究理の學に通せば此等の細変る尙論天地
乃間千葉の变物一つも明亮ざるおとあし
魔の壇乃事

○西洋めを酒席杯の戯ひれ用る。魔の壘
 とりふをけあり。上より一合の水を注入
 時を。下より同く一合の酒と出く。はる五
 分の水を注入き。即ちまると五夕の酒を出
 せ。実ふ不思議の様あり。其器さう見ては通
 例の壘の様をれどぬ。中乃仕掛と現し時を
 左乃番の如く「ト」の處ふ中段ありて上下ふ
 分れ。外中段ふ「ニ」の管ありて「イ」「ロ」の空氣相

通ず「ハ」乃口よ

魔壘の番

り中めは漏斗
 の如きをけあ
 りて。殆と中段
 ふ達く「ホ」る酒
 の出る斜なる
 管なり。先づ底よ穴ありて「ハ」の處ふ酒をこ入
 置き。又「チ」の處ふ水を少許注入て「イ」の管乃



置き。又「チ」の處ふ水を少許注入て「イ」の管乃

下端を水中に没せしむ。斯様にして酒席より
 持出し。一の口より一極の水を注入れ。二
 の空気を適るゝ道あり。三の管を通りて四
 此空気を壓す。四の空気をまた五余系。六乃
 酒を壓し。七乃管より一極の酒を出し。其壓
 力も七を一極より起り。故其出る容も又
 一杯あり。七より上より多くの水と注げば。ま
 た多くの酒を出し。其理を知れば。實は

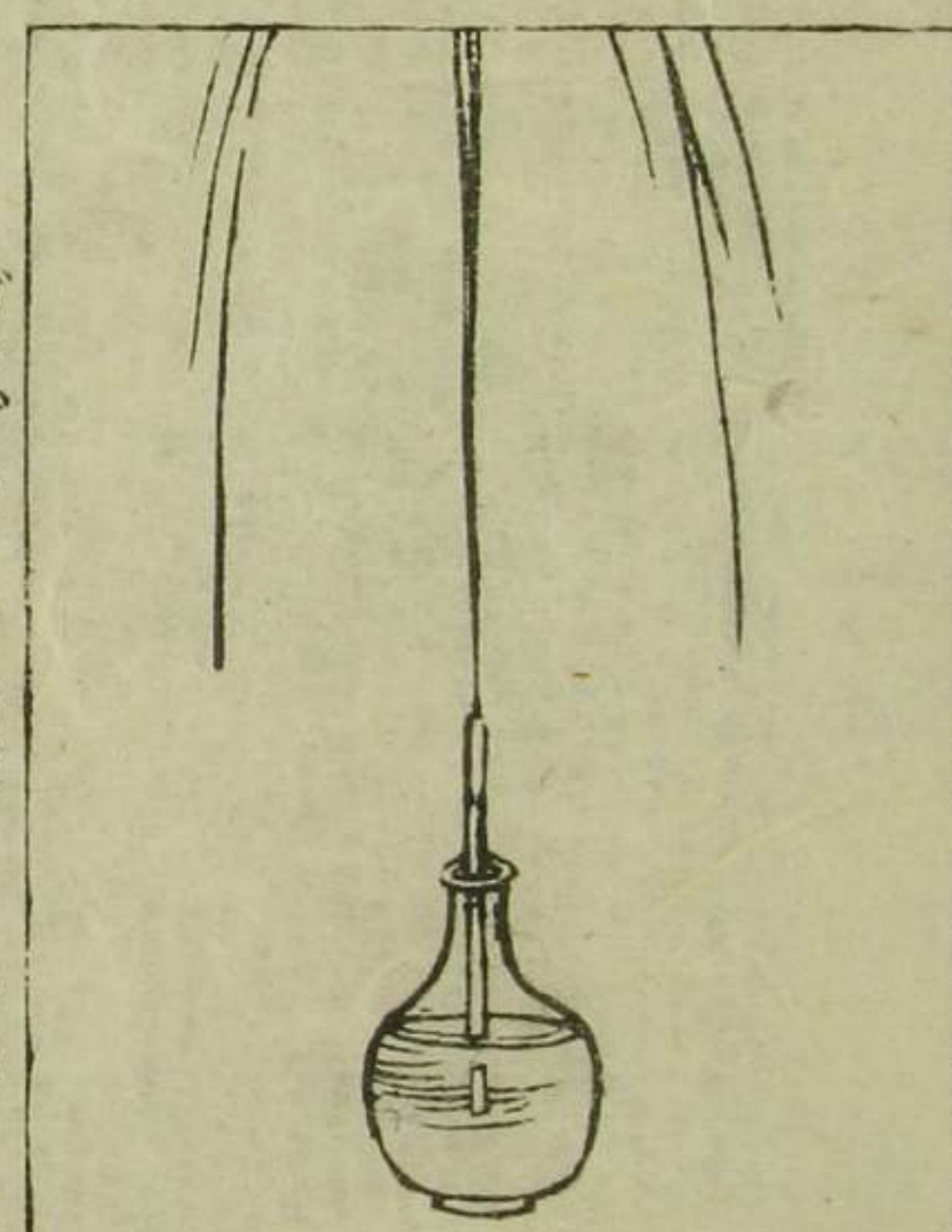
奇なり

○都て空気を云ふは。此を壓は。收缩み。故せば
 まゝと膨張れて。素の容となる。其壓力甚ど強
 し。大抵右上の魔の壇にて。其理を知るべし。
 又子供の手遊の紙鉄砲も。空気の壓力小基
 きたるゆえに。先小玉を一つ入置き。
 あとより又玉を入。心棒を押込。先の玉
 と。向との玉と。乃間ある空気を。漸く縮み

ぬれどもの^ひ 遂に^と 度小^さす^ふて^て 空氣の^{くわき} 膨張^{ふくら}る^か
 み^て 先の^{さき} 玉を^{たま} 押出^{おしだ}す^るの^{なり}なり ○ 空氣^{くわき}も^も 又^{また}
 温^ぬを^を う^うく^くれ^れば^ば 膨張^{ふくら}て^て 其^{その} 容^{ゆる}を^を 増^まし^し 冷^ひま^はま^ま
 と^と 踏^ふま^まて^て 素^{もと}小^こ 帰^かる^るり^り 此^{この} なる^{なり}。よ^よく^く 海^{うみ}の^の 坐^ざ敷^{しき}
 る^るど^ど ぬ^ぬく^く 小^こ さ^さあ^ある^る 硝^{しょう}子^し 壇^{だん}を^を 手^ての^の ろ^ろち^ち 小^こ 握^{にぎ}
 り^り 居^ゐり。之^{これ}を^を 知^しら^らざる^{ざる} 搦^な茶^ち 碗^{わん} 乃^{すなは}ち^ち 小^こ 容^{ゆる}れ^れ 婦^ふ
 人^にあ^あぞ^ぞ 小^こ 霧^{きり}と^と 吹^ふ解^げて^て 戲^{あそ}れ^れと^と する^るなり^{なり}と^と 此^{この} あり^{あり}。
 此^{この} 空^{くわ}氣^きの^の 膨^ふ張^{くわ}る^る 理^{こと} 小^こ 基^{もと} きた^たる^る 乃^{すなは}ち^ち の^の 由^{よし} ため^{ため}て^て。



其理を左の面乃如
 く小なる硝子壺に
 半分過ぎ水と入る
 上の方少し許水を
 く空氣の処あり。口より硝子の先の細き管
 を水の中まで差込る。壺の口を蠟ふと空氣
 乃とれが密密封し、壺の底を温むる時
 中乃空氣膨張水と推し管より飛出さる



むるもはあり

尚空氣ふくらこりこりこり
 く鎌鼬風龍巻扱も皆空氣の作用あれ
 ども是等る皆二編み出すべし

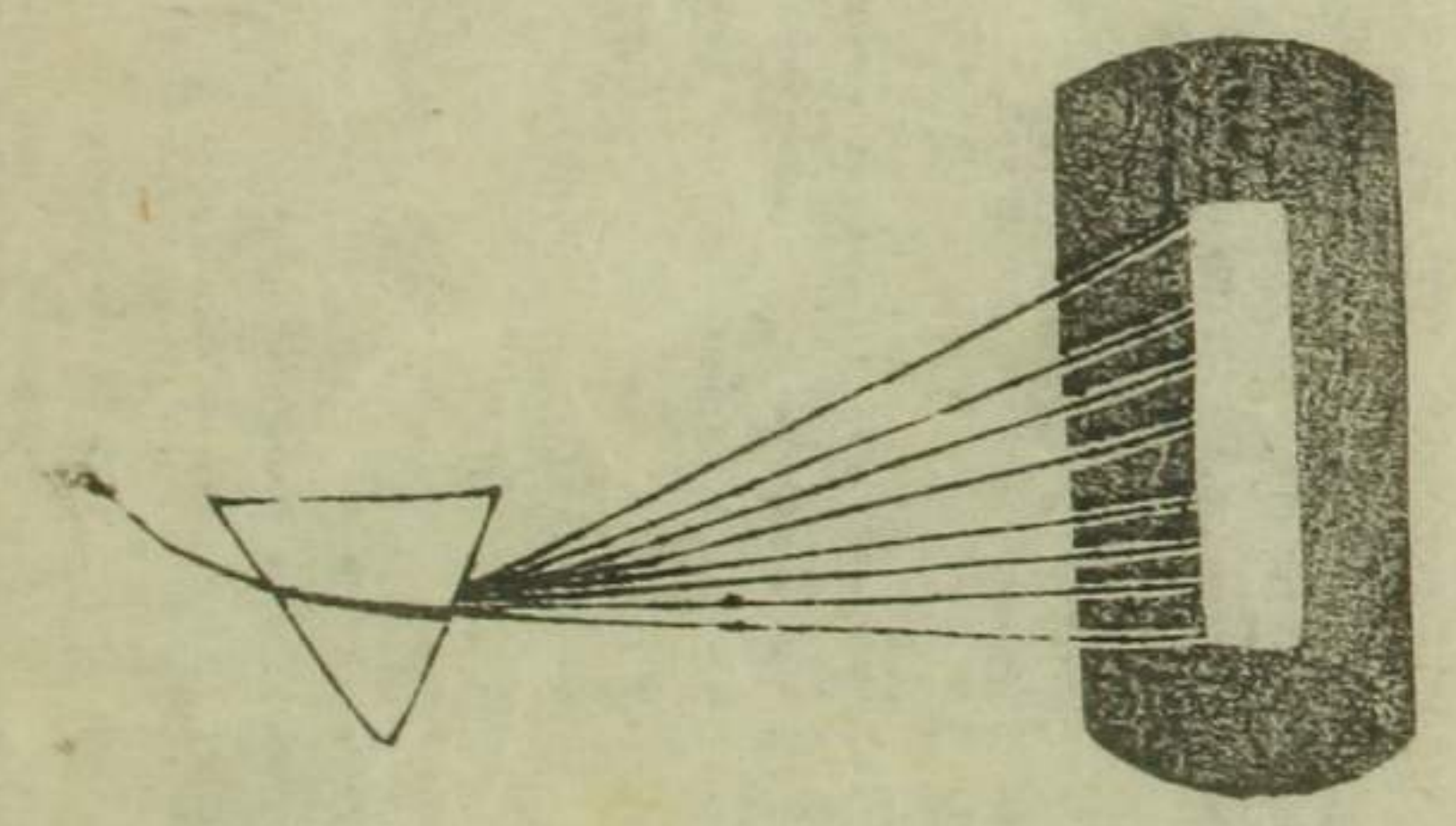
虹霓および日暈月暈の事

○古昔も虹の騰るを見て神の飲食と吸ひ
 取ふ杯と云へる全く物理を知ざりしものなり

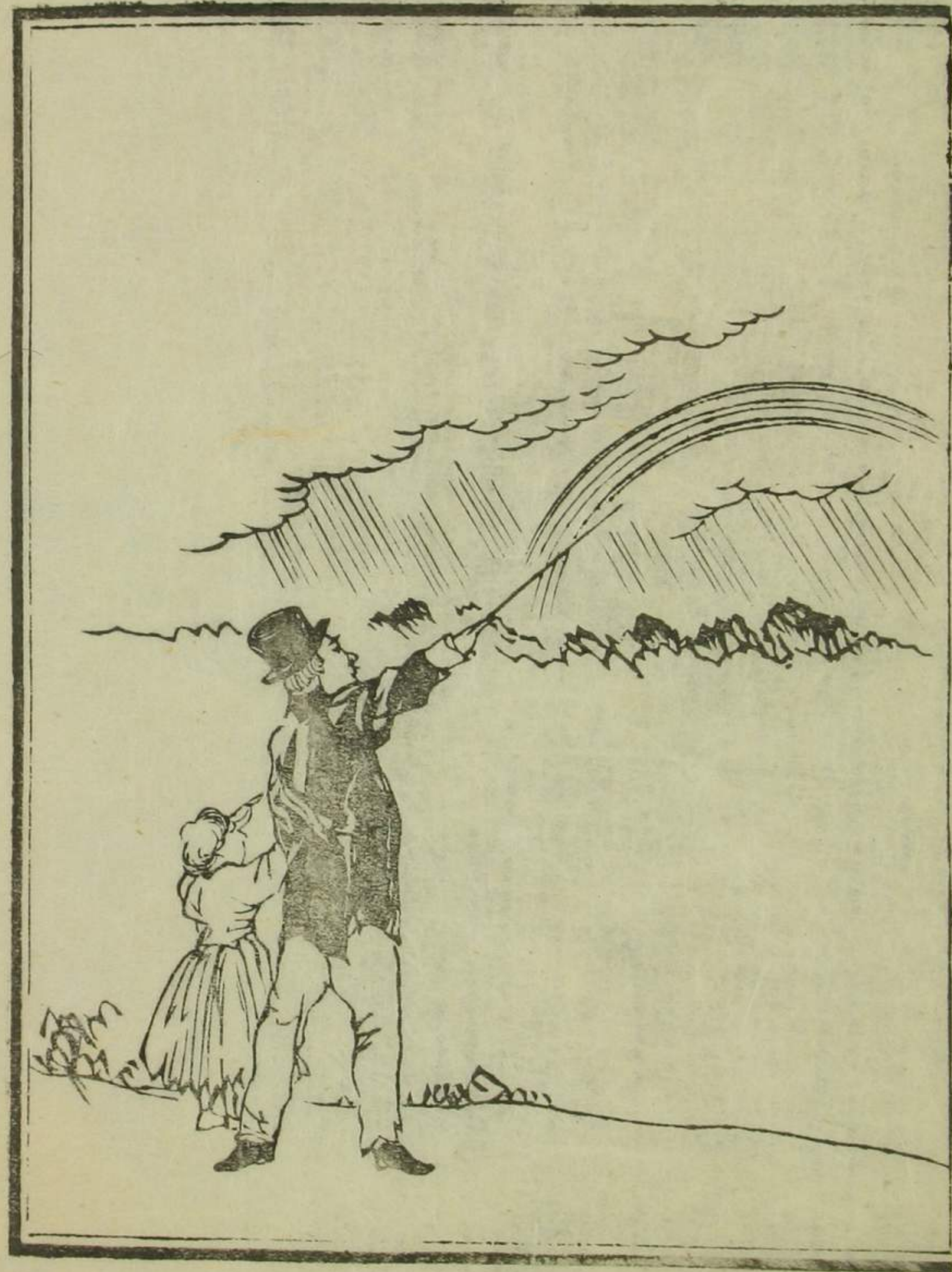
もあるき虚言と鏡しを託あり。虹乃摺る片村
 厨の時ふうだり。何も怪むべきらぬのふ非也。
 先虹の理を知らんふは光の物より蓄りと反
 射る理と光の七色に分るゝ理と合点せん
 光の物より蓄りて反射る理も合鏡をあるす
 と見。後ゆきくる鏡より来る光を前の鏡に
 映り。それより折を反射りて。我眼より入るを
 の故。又後の姿も見ゆるなり。又光乃七色分

分るゝ理合る。戸乃
 節穴あざより日光
 の輝き入る時五六
 寸斗りの三角ある
 硝子を以て其穴に
 密て光りを受け室
 内を少し暗くする
 時。日輪の光り分

日光三角硝子を通して
 虹の本色を現したる面



れも七色となるを証あり。此七色は日光乃
 本^{もと}色^{いろ}あれども唯^{ただ}ら碎^{くだ}けを見^みへざるも斯^{かく}る
 硝^{びいどろ}子^こへ斜^なに透^すき通^とるより。本^{もと}来^{らい}の色^{いろ}と頭^{あたま}
 たるあり。虹^{にじ}乃^{なり}彩^{いろ}色^{いろ}も七色^{しちいろ}を。虹^{にじ}硝^{びいどろ}子^こも透^す
 き通^とりある色^{いろ}と水^{みづ}も異^{ちが}あるとあり。即^{すなは}
 ち村^{むら}雨^{あめ}の數^{かず}限^{かぎ}りある水^{みづ}滴^{たみ}ら皆^{みな}鏡^{かがみ}の如^{ごと}く。日^ひ
 輪^{りん}の光^{ひかり}を通^とす。日^ひ輪^{りん}の光^{ひかり}を夫^{また}より折^かえて人^{ひと}
 乃^{なり}眼^めに反^{かえ}射^しり。七^{しち}色^{いろ}乃^{なり}菱^{ひしや}鏡^{かがみ}なる姿^{すがた}に見^みゆる



を自然の理あり。扱又虹も朝西み見へ夕る
東み見ゆる事とみ極まり。あれ日輪と後乃
鏡とくお雨の水滴と前の鏡と比べるに朝
夕ともみ日輪と後みく見る乃理なり。日
光水滴を通くと七毫みある理と。一寸あり
る見んと思はる。水と合くと日光と背み負ひ
其水を噴出さば。目前み虹の如き七毫と薄
まると見るを

○日暈空を高さ程寒さ強さを此めて富士
の山物は夏も雪あるハ其寒さ澄秋あり。
其寒き所へ雨と結ぶべき細やりのなる霞乃
携り凝て氷とあり。日暈を即ち氷へ日光
透き通るより。環の如き光を頭ハすめ此ふ
と。猶お雨の水滴日光を受けを投返さる異
るくやあり其水滴の氷地は通き時と其暈
大きく見へ遠き村を小さく見ふ又水の都



此乃為

合あめより二重三重の暈まを現あらし互たひひ日光ひかりと射やりしと七ツの日ひ同時どうじに出いく様ように見みへ
しとあり

○月暈ツキカサ月暈つきまも日暈ひまと同おなじ理り合あめを夜中空やま
み水みづ氣き凝こりて氷こおりを生なじれば即すなハち月つき光あかり出いく
れみ映うつりて其その周まわり輪りんを現あらわす。日輪ひりん大おほ
空そら乃すなはち氷こおり映うつりてと云いふとあり。其その澄すみみ
扱あつと一寸いちゆんあり。我われ眼まなこを好このむ

燈火とながむる致。まことハ燈火と見る
 うと口み水を念とて吹出すべし。左とれど
 燈火と眼との間ハ細うき水滲と生かざる故。
 燈火茲み映ふて。其周囲み暈と現る。日月
 の暈も皆出の理あり。故ハ月もまこと互み映
 るえ合ひ同時ハ二三体の月出ハ様ハ見ゆ
 るおともゆるべし。都て日月ともみ暈と現
 るは空中の濃氣疑て雨と結ふと此ゆる雨

思ひしより。遂ハ邦俗とわりたるをけり
 猶空氣中みる海市蜃樓空乃船空の橋空
 中乃巨人其外いろく奇ある事多けれ
 ども皆二編ハ出すべし



珍奇物語初編上 終

